

ふんどし

想い | つくる | 伝える



[Fuud]

2010 春号

— 季刊 —



繋がる

Take Free
ご自由にお持ちください

明治34年、当時先端の産業技術交流のための展示会が中央区一番堀通、いまの市役所のあたりで開催された。新潟県主催・府十一県聯合共進会々場之図<抜粋> 作者：玉英 新潟県立図書館所蔵



高田の雁木通り [上越市]

文・写真 / 榎本国男

逆境の記憶

旧・高田(現・上越市)は豊かな歴史に彩られた史跡の町です。よく知られているのが雁木の町並みです。雁木は豪雪地帯特有のもので、語源は雁が重なって飛んでいる形に似ていることから、と言われていました。雁木づくりの住居が並ぶ町家を"雁木通り"と呼び、現在も仲町通、本町通、大町通、さらには東本町・北本町・南本町に雁木が立派に現存し、その総延長距離は16キロにおよび、日本一の雁木通りになっています。

雁木通りの歴史は古く、寛保3(1743)年には既に存在していました。道路と接する家々は道路側に雁木と呼ばれる庇を出していますが、雁木自体は各家の敷地につくられる私有の建物です。それが雪をよけ雨風を凌ぐ歩道となります。豪雪地帯・高田の祖先たちは、雪下ろしの雪の処理場所として道路を使い、人は雁木通りを伝い歩くという知恵を生み出したのです。雁木は、雪国の《相互助け合い》と《譲り合う心》が形になった貴重な地域遺産ともいわれます。行政も雁木保存のために、修繕改築費等の助成制度を設け保存に力を入れています。

かつて本町通りは江戸へと通じる道で、加賀藩の参勤交代の街道であり、佐渡金山の金もここから江戸に運ばれた主要街道でした。そして松尾芭蕉も十返舎一九も歩きましたし、雪国の風物を記した鈴木牧之の『北越雪譜』にも「雁木の下広くして小荷駄をも率へきほどなり、これはこの雪中にこの庇の下を往來の為なり」とあります。

明治期の雁木通りには17軒89人の瞽女が暮らしていた記録があります。全盲の女性が瞽女になり、瞽女唄などを修業し、何軒かの親方が「組」を組んで方々へ巡業の旅に出て僅かな収入を得て生活していたのです。高田瞽女最後の親方杉本キクイさんは声よし、三味よし、と言われ名を馳せました。

町の名物として特筆すべきは、雁木通りの狭い仲町地区に密集する飲食街です。また、駅背後の表寺町通りの寺院群は全国的にも有数の寺町と呼ばれ66ヶ寺が集中しています。これは宗門への信仰もさることながら、いざ春日山城戦時のときには兵役武士の待機場の役目も果たしていたとの説も有ります。

雁木通りの一面に、明治期の木造洋館があります。レルヒ大佐とともに日本スキーの発展に尽くした長岡外史中将の官舎として建てられ、後に旧陸軍第13師団長官舎として使われました。総二階建て部屋数10間の贅を尽くした建物で「旧師団長官舎」として一般公開しています。

また夜桜で有名な高田公園の中に、旧・高田出身の小林古径の記念美術館があります。新古典主義と呼ばれる作風で『鶴と七面鳥』『孔雀』『清姫』等を発表。後に東京美術学校教授になり、文化勲章も受章しています。



発行所



■本社・工場 / 〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800
■東京支社 / 〒110-0005 東京都台東区上野1丁目13-3 MYビル2F TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884
■仙台営業所 / 〒981-0901 宮城県仙台市青葉区北根黒松8-12 昭和マンション黒松103号 TEL (022) 728-0506 FAX (022) 728-0510
■オフィシャルサイト / <http://www.takayoshi.co.jp> ■商品サイト / <http://www.tk-print.jp>

「ふんどし」はここに置いてあります。

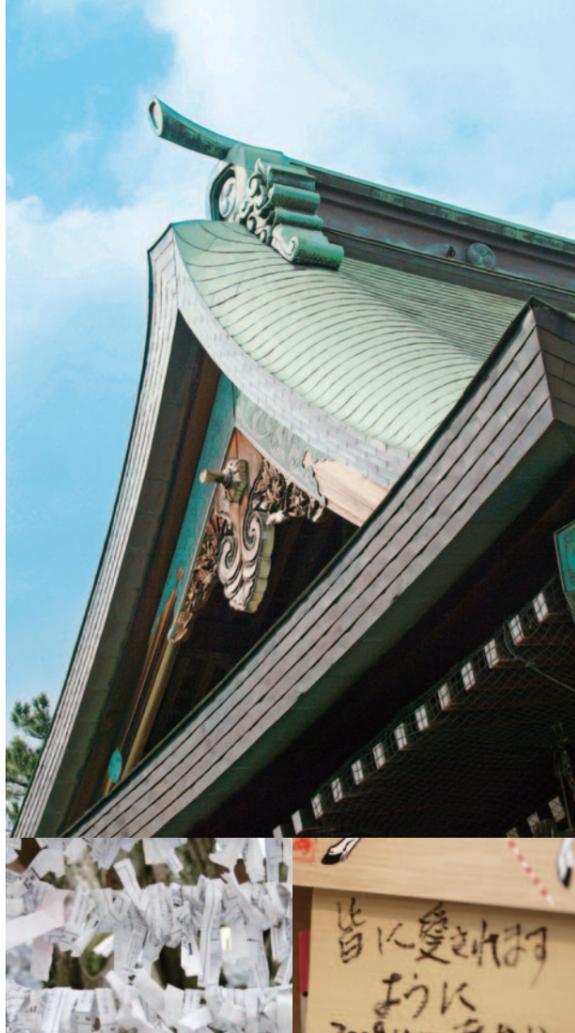
【新潟市】新潟NPO協会(中央区)、新潟絵屋(中央区)、新潟県政記念館(中央区)、新潟県立図書館(中央区)、新潟市市民活動支援センター(中央区)、新潟市生涯学習センター図書館(中央区)、新潟市商工会議所(中央区)、新潟市中央公民館(中央区)、新潟市中央図書館(中央区)、新潟ユニソンプラザ(中央区)、新潟市歴史博物館(中央区)、古町サテライト(中央区)、新潟大学図書館(西区)、新潟ふるさと村(西区)、新潟せんべい王国(北区)、亀田図書館(江南区)
【長岡市】長岡市立中央図書館
【東京都】表参道・新潟館 ネスバス(渋谷区)、日本橋・いいがた館NICOプラザ(中央区)

この印刷物は環境にやさしい米ぬか油のUVライソインキで印刷しています。 RICE INK



ことから、神社の歴史は新潟町の誕生より遙かに遠い。江戸期の新潟町を領した歴代の長岡藩主の崇敬と保護も篤く、数々の宝物が時を超え守り伝えられ、廻船問屋や文人の奉納額とともに、新潟のありし日々を確かに証している。明治六年、一万坪あった境内地に白山公園ができ新潟学校が移転してきた。後に物品陳列所が建つなど、白山界限が文明開化の先端エリアになり、そのまま今にいたっている。

→江戸初期、長岡藩主・牧野氏みずから監督して造営された白山神社の社殿。質実剛健の藩の気風と湊町新潟の息づかいを感じる。随神門と回廊に囲まれた境内は、現代の騒音を呑みつき、静かな時間が流れている。<中央区一番堀通町1>



想い
過去とつながる

都市は人類最大の創造物である。それは必然で固められ、偶然が入る隙はない。二〇一〇年春。地方都市の中心市街地の商業地区が役割を果たしきれずに、じっと耐えている。これは日本だけの現象ではない。先進国では二十年ほど前から問題になっていた。そんななか日本各地の商店街から視察に訪れる町が、新潟市にある。中央区の上古町商店街である。この町が探り当てた町の必然って、なんだろう。



旅するように

風景の謎とき

白山さまの大鳥居から上古町商店街を見ると、昭和風の街並がシックなアーケードをまとい商店街の中へと導いている。よく見ると道が緩くカーブし遠くまで見渡せない。どこか謎めいている。十三番町まで続く古町通は、中心部を除き、すべての道がゆるやかに曲がっている。この自然な曲がり方に、江戸初期に湊町として整備された新潟の町の記憶が隠されている。

三月のある夕方、たまたま巫女さんがひとり拜殿で舞う姿を見た。ゆったりとした雅楽の調べにあわせ、優雅に手足を伸ばしていた。時折、若いカップルが参拝にくるだけで、拜殿には誰もいない。神々に捧げる美しい饗応。日々の決め事なのだろう。ちょうど蓄薇の花びらのような大きな雪が舞い降り、神寂びた世界が暗闇に浮かあがっていた。平安の人たちも、この光景に触れたのだろうか。

下の鳥瞰図は昭和十三年当時の新潟市を描いたものである。堀が基盤の目のように町中を流れている。とくに西堀や東堀など町を南北に貫流する堀は、ほぼ島の縁や信濃川と平行している。堀のまわりや間屋や商家が建ち、町の原型がつくられた。堀はたいがい古い河床を利用してつくられる。だから古町通の湾曲は、かつて信濃川がもっと奔放だった時の大地の想い出でもあり、その大地は大河によって造られた三角州であることを教えてくれる。

そう、新潟は島なのである。

はるか遠くの記憶を、現代につなぐ「白山さま」

上古町商店街で、ひとときわ目につく白山神社の朱の大鳥居。俗界と聖域を厳肅に区切り、静寂な心の世界へと誘ってくる。

新潟の総鎮守・白山神社の御祭神は、菊理媛大神である。女の神様で「くくり」という名のとおり、「ものごとの結び」を司る。縁結び、商売繁盛、家族円満の神として、古くから「白山さま」と呼ばれ市民に親しまれてきた。境内には蛇松明神・住吉神社・松尾神社・黄龍神社がまつられ、本殿にはたくさんのお神々が合祀されている。夜もあけきらない頃から、参拝する人の鈴の音が響いてくるという。

神社の社寺明細帳によれば、その草創は千年前の平安室町までさかのぼる。戦国時代すでに「白山島」という地名が存在し、上杉景勝が新潟湊での戦勝を敬して奉納した宝物が納められている



絵図 北越商工便覧
大正8年発行 長岡市立中央図書館所蔵



昭和初期の新潟市を描いた鳥瞰図。昭和13年、白山公園の背後地に開催予定だった日本海大博覧会の事務局が発行したパンフレットの表面。結局、博覧会は日中戦争の影響で幻に終わった。
吉田初三郎 作
昭和12年日本海大博覧会事務局発行 新潟市歴史博物館所蔵





蔵とビルが合体した珍しい建物。夜、店内からこぼれる灯りが美しく、異国に来たようである。(古町通3)



シックなアーケードがレトロな外観を惹き立てる。昭和風のショーウィンドについ目を奪われる。(古町通2)



良寛さんの話になると少年のように目を輝かせた考古堂の会長、柳本雄司さん。町への眼差しも優しい。



発芽玄米の生もちが入った、えんやのおしるこ。故郷のような温かい味がした。つきたての発芽玄米もちで作った、黒ごま・黒豆きなこと・黒蜜など珍しい団子も、自然と健康へのこだわりを感じる。(古町通4)



一般の甘酒は酒粕を使うが、古町糰子製造所の糰子の甘さは作り立ての糰子を使用するため、砂糖なしでも甘い。アルコール分がなく、子どもでも飲める。<古町通2>



そのせいなのか、ちょっと不思議な感じがする。古町通一丁目から四番町まで続く古町は、明治になるまで神明町と呼ばれていた。人通りのない町外れに神社仏閣が点在し、門前は参拝客で賑わったが、あたりは葦原や水田が広がり、梵鐘や鈴の音だけが人のありかを伝える寂しい町だった。



上古町にも
新潟の記憶が眠っている

時の迷子になる

上古町を歩いていると、ふと神秘的な気分を感じることがある。その先には古いお社があり、空に寺院の大きな屋根が見えたりする。周囲を高層ビルに狭まれても、なお神威や法力の強い気を放ち、人と神、あの世とこの世をつないでいる。古町通一

なことがあった。まだ大雪の痕が残る頃、あるお店を探しきれず、古町通の小路を一本一本探してみたら、ついに見つからなかった。その時、たまたま新川小路に懐かしい名前のカフェを見つけ、灯りに惹かれるように古びた階段を上った。そして重いガラス戸をあけ店内を見渡した瞬間、息を呑んだ。目の前に昭和があった。使いこんだ分厚いカウンター、埃っぽいダウンライト、けだるいジャズ。なにかも一時期流行ったカフェスタイルのまま時を止めていた。知る人ぞ知るカフェ砂場。三十年の時を堆積したまま、まだ健在だった。



新川小路のcafe砂場

日本人の忘れモノ

考古堂の良寛さんの壁画は、新潟と良寛のかかわりを伝える大きな目印だ。会長の柳本雄司さんは、良寛さんが大好きである。良寛さんの慈しむ心を広げようと、仕事に活動に忙しい。住み慣れた上古町につ

て「ここは白山神社や文化施設に来た人が、町の中心部まで歩いてもらうのに、びつたり場所。昭和三十年の新潟大火の時も風向きのお蔭で焼けなかったたので古い街並が残り、小路めぐりや下町の雰囲気を楽しむ。神明宮の境内に、芭蕉が新潟に来て詠んだ句碑もあったり。これからは、町に眠っている古いモノを新しく捉えて魅力に変えていくことがコツでしょう。若い人が新しいアイデアでお店を出し、もっと活性化すれば古き良き日本がある町として、大きな流れの中心になれると思います」と地元への愛情を示す。上古町の活性化事業にかかわった新潟商工会議所の小嶋一則さんも「いまどき、これだけ個人的な町は少ない。歩くだけでも面白いです。古町通には町の想い出が堆積しているから、全体で街歩きの楽しさを伝える町になれたら、いい」と言う。

好きになつた

つくる 未来とつながるデザイン

上古町が、おしゃれになった。新しいお店も増えた。なかでも新名物は「古町糰子製造所」。話に聞いていたがはじめて入り、スタイリッシュなのに、温かい空気に驚いた。酒や味噌醤油の醸造にかかせない糰子を使う、濃厚な甘さけ風糰子ドリンクが年代を問わず大人気である。スタッフの一人、黒田保葉さんは「週四日の限定営業ですが平日でもお客さまの切れ間がなく、土曜日は行列ができてしまうんです。ネットを見て県

外から来られるお客様もいました」と話す。本部は東京だが、経営者は新潟出身者である。新潟で実直に伝統製法で作る糰子との出逢いが、新スタイルの糰子ドリンクを生んだ。伝統の洗練である。上古町の雰囲気は糰子の甘さけと同じ世界観を感じ出店し、予想を裏切る反響に驚いているという。

オーガニック志向の「えんや」も、通りの風の心地良さなどが気に入って昨年末に開店した。発芽玄米にこだわった団子や神恵米を販売している。



来年で創業100年になる考古堂のビルの壁面に、良寛さんと子どもたちが描かれている。(古町通4)

デザイナーを販売する迫さんは「毎日新鮮です。お客さまから直接反応を聞けるので、モチベーションを持てます」と町に出店する効用を説いた。自分のファッションブランドを持ち、店内で洋服づくりをしながら店を運営するOdd Fellow=Trampの大竹晃さんも「洋服のデザイナーには、表現する意味や理由がこめられています。その気持ちをお客さまに伝える時は、嬉しいです」と話



「うわあ、きれいな」と若い女性が歓声をあげるシーンを何回も見た。上古町商店街振興組合の酒井さんが言った「誰もやったことがないことを、やる商店街」という言葉に、町の必然と未来のヒントがあるのだろうか。

人の笑顔が、人を育て町を育てる

伝える 人と人がつながる

ほっと、する

上古町にいと感情がよく動く。刺激されるモノが多い。それはクリエイター兼店主が大勢いるから。作り手と買い手が直接つながることで、お互いに喜びを共有できる。

す。イラストレーターでTOROWAの店主・吉開正秋さんは、自作のイラストを飾り店内を画廊風に仕立てている。ほかにも工芸作家やハズマン自身の出店が多く、町のあちこちでオリジナルティの高い商品がさりげなく販売され、かつての「ふるぶら」の楽しさがよみがえる。

四百年ほど前、野地でしかなかった場所に、未来を携えた若い人たちが集まってきている。文明の起源は、人と人とかかわりあり、その刺激でより良いモノへの創造する意欲が生まれたことにあった。上古町商店街振興組合の酒井さんが言った「誰もやったことがないことを、やる商店街」という言葉に、町の必然と未来のヒントがあるのだろうか。



風景と馴染むアーケード

アーケードと歩道が完成してから一年。夕暮れから夜にかけて、小暗いアーケードの下でお店が個性を競いあう町の表情はとくに美しい。「うわあ、きれいな」と若い女性が歓声をあげるシーンを何回も見た。

上古町商店街振興組合の酒井幸男さんは「工事の段階ごとに、専門家をまじえ現地で実験し検証してから設備やデザインの詳細を決めました。色・形・照明の位置や照度、サインの位置などかなり、こだわっています」。ただ町のインフラ整備は設えでしかなく、それより町の宝物を未来につなげる心構えを商店街で共有する方が先だったと当時をふりかえる。「六年前、あらためて町の歴史を勉強し、町を知ることから始めました。そしてコンセプトを〈温古知新〉と決め、その心がひと目でわかるロゴマークを創り、町の良さを知らせる工夫を重ねて、ようやくここまで来ました」。まだ途上だが、日々訪れる人が増え、空き店舗数は減っている。

クリエイターがつなぐ町の未来

上古町が出している制作物は、と

こか懐かしく親しみがある。時代の空気なのだろうか。制作しているのは、hickory03travelersの迫一成さんと二人の仲間たちである。六年前、上古町に出店してきた。「はじめは自分たちがデザインしたTシャツを、見てもらうための出店でした。

その後、商店街と関わるようになり、街全体をデザインしてみたくなり、町の魅力を活かしながら自分たちも楽しめることをやっています」。上古町の魅力は「町全体がアトラクション。買物というより何かを探しに来る町です。その期待に込めるだけの、ここにしかないモノがあり、自分の感性で掘り出し物を見つけ、四月中旬、向かいのビルに店舗を移転し、新規出店する二店舗と同時にオープンするそうである。若きクリエイターたちは、こんどは何を見せられるのか。楽しみである。

それにしても「若者の店」という固定観念だけで通り過ぎていたお店も、思いきって話を聞いてみると、みんな志を持って懸命だった。伝統と進化が共存する町づくりの原動力が人の想いにあることを知り、上古町がいっそう好きになった。



新潟市上古町商店街
新潟市中央区古町通一番町〜四番町
http://www.kamifuru.info
(アクセス)
●新潟駅より車で十分
●白山公園前「鍛冶小路」バス停より徒歩一分
●新潟ハイパス桜木一Cより車で十五分

【編集後記】
上古町商店街は町の役割を思いださせてくれ、町づくりの生きたお手本でした。若い店主が自然体で仕事をしても姿に、次代を感じました。長く頑張っほしいと思います。でも厳しい現実もあるようです。日本には、ひと昔前まで「仁義賣い」という習慣がありました。地元のお店を守るための住民同士の小さな助け合いです。町で暮らす人々のマナーでもありません。おなじ時代を生きている私たちです。そろそろ個人的感情だけでなく、私たちが町を育てていく時代が来ているのかもしれない。忙しいところ取材のために時間をさいていただきました。皆様、ありがとうございます。

企画編集 株式会社タカヨシ広報室
取材 高橋春義
写真 榎本国男
デザイン 渡部佳則 東浦一夫
発行所 株式会社タカヨシ

① 上古町の制作物を引き受けるhickory03travelersと代表の迫一成さんと古町通3>
② イラストレーターの吉開正秋さんが経営するTOROWA<古町通4>
③ 日本の伝統的なモチーフを現代風にアレンジした作家の一点物(hickory03travelers)
④ 通りのあちこちに置かれた筒状の商店街MAP。もてなしの心とセンスの良さが際立つ
⑤ 上古町商店街のロゴマークを全面にあしらった可愛いマグカップ(hickory03travelers)
⑥ ファッションデザイナーの大竹晃さんと友人が経営するOdd Fellow=Tramp<古町通2>
⑦ 創業80年のレストランキリンのドミグラスソースの懐かしい味のオムライス<古町通1>